

ガンとの闘い

伊藤一葉

ガンとの闘い

——45歳で逝った奇術師の日記から——

伊藤一葉

大和書房

ガンとの闘い

——45歳で逝った奇術師の日記から

著者 伊藤一葉 ©1980

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号 一一二

電話 (二〇三) 四五一一

振替 東京一六六四二二七

印刷所 奥村印刷

製本所 東京美術紙工

0012-051280-4406

これから先の人生をずっとシラフで通すなんてとても考えられぬ。ほろ酔いのような、白昼夢のような世界に漂っていたいという思いがあり、それが黄金色に輝いた桃源郷であり、理想郷であるという思いがある。

思えば今までの人生をずうっとそういう世界で過ごしてきたような気がする。白昼夢の世界から現実の世界に戻り、再びあるかなきかのごとき世界に戻っていく。その往復がなくなり、広野を、果てしのない広野を力つぎるまで歩いていかねばならぬというのでは、それはむごいはなしである。

(昭和五十四年五月十四日の日記から)

●目次●

序 章 ●残された日記帳..... 5

第一章 ●ガン宣告..... 21

(昭和五十一年十月八日、昭和五十四年二月二十四日)

落ち目になってきた／毎日が日曜日／何もする
ことがない／やっとCMが決定／新ネタが
ない／わき腹が痛い／人気凋落の激しさ／気
味の悪い鈍痛／利文も大人になった／体調良
好／禁酒四日目／朝、胃に不快感が／医者に
行く／悪性の病気はない／疲労感で朝起きら
れない／身体のこととは考えないように／疲れ
やすく胃の具合が悪い／精密検査を受けてみ
よう／頭が働かない／ノイローゼになりそう
だ／家のローンが心配／ハワイ旅行／顔に疱
疹が／帯状疱疹は治る／来年こそ芸を広げた
い／食欲がさっぱりしない／氣力がわかない／

ガン宣告／入院するかもしれない／駒込病院
で検査／ベッドが空いた

第二章 ● 四月までの命

(昭和五十四年一月二六日～三月三日)

入院／点滴に驚く／隣室の病人の苦しみで眠
れず／腸が悪いのではないか／注腸透視／早
く、早くはつきりしてくれ／血管造影／肝シ
ンチグラム／慢性肝炎と診断／EPCG／早
く退院しなければ／食事をなんとかしてほし
い／ヒサ子がまいている様子だ／検査終了

49

第三章 ● 不安と希望の毎日

(三月四日～五月二十四日)

長期戦の覚悟が決まった／だいぶ容体は悪い
ようだ／回復を待つしかない／窓からの眺め
もうんざりだ／辛抱するしかないのか／何か
やり始めよう／毛が激しく抜ける／個室に移

81

る／一喜一憂状態がつづいている／不安で夜が眠れない／五月には退院したい／素晴らしいうんこが出る／来月には外出ができる／快便、快眠、快食／花見／神に感謝したい気持ちだ／胃潰瘍を手術するかもしれない／叫び出しそうだ／遺書めいたものを書いてしまった／悪い夢を見ているようだ／まわりがみな敵に見える／手術した方がいい／これからどう生きていくのか／淋しくてたまらない／まだ退院できない／今週の外出は中止しよう／手品などやりたくなかった／早く退院したい

第四章 ● ようやく出口が見えてきた……………

(五月二十八日～六月二十七日)

あと三週間で退院／奇術には人間のドラマがない／千円札の手品をやる／これなら仕事もやれそうだ／残りの人生を……／カツラができた／健康な世界にもどれる／胃潰瘍の手術も中止／手品の基礎訓練を始める／肝臓の

検査結果に問題が／退屈で新聞をよむ／これからぼや／と生きよう／四十五歳をむかえる／髪もはえてきた／食欲が出てきた／輸血／二十九日に退院決定

第五章 ● 退 院

(六月二十八日～九月十二日)

退院は本当だった／嬉しくて落ち着かない／たまらないほどの幸福感／犬にはえられ心臓がとまる思い／体も慣れてきた／よだれに血が／涙やタンにも血が／第一回目の通院／頭痛、手のしびれがとれない／とにかく身体がだるい／わき腹が痛くて寝苦しい／またわき腹が痛い／なぜ体重が増えないんだ／あばらの痛みが特にひどい／入院中よりひどい状態だ／長時間起きていられない／体重が1kg減った／終日ゴロゴロしている／左背中にいやな痛みが／八か月ぶりのテレビ出演／痛みで根気がなくなる／朝食後具合が悪い／駒込病

院で診察／仕事で九州に／高熱が続く／退院、
入院をくり返さねばならない／相当の重症だ
／口をきくのがやっと／最後の入院

終章 ● 「早く楽になりたいね」

(九月三十日)

163

父へ

伊藤利文

174

あとがき

178

装幀 ● 熊沢正人

編集 ● たあぶる館出版

序章

残された日記帳

激しい嵐が東京都立駒込病院の病室の窓に打ちつける夜、奇術師伊藤一葉さんは、胃ガンのために全身から血を吹き出すようにして、叫び声をあげながら四十五歳の生涯を閉じた。

「早く楽になりたいね」

それが妻ヒサ子さんに残された、最後の言葉だった。

昭和五十四年九月三十日、午前三時五分――。

あまりにも壮絶な最後であった。

四十五歳の働きざかりを突然襲ったガン。

死を宣告された夫に、ヒサ子さんができることは、夫がガンであることを隠し通すことだけであつた。その苦しみは、ガン患者を持った家族でなければ想像もつかないだろうとヒサ子さんはいう。

「まさに修羅場でした。夫が一日一日死に近づいていくのを見守りながら、泣くことすらできないんです。それどころか、少しでも疑われてはいけけないので、いつも元氣な顔を見せていなければならいんですから。普通の人間ではとても耐えられない地獄のような生活でした。鬼にならなければ生きられませんでした」

夫がガンだと知らされてからの二百五十五日は、まさに地獄の苦しみだったという。そして、父親がガンであると知りながら、本人にはもちろん、母親のヒサ子さんにもそれと知らぬそぶりで平静をよそおっていた長男の利文君（十六歳）。

二百五十五日のガンとの闘いは、一葉さん、ヒサ子さん、利文君の、親子三人の闘いでもあったのだ。

一葉さんが亡くなって三日後、虚ろな心で、ヒサさんは夫が残した四十冊のノートを初めて開いた。このノートは、結婚してからの毎日の生活を克明に記録した日記である。

眠れない夜、ヒサさんは日記の一頁、一頁を原稿用紙に書き写した。作家になりたかった一葉さんの意志を、何らかの形でかなえさせたいと思ったからだ。

「ずっと、お金がない、貧乏だ、これからどうなるんだろう、そんなことばかり書いてありました。一日百円で生活していた頃です。それが、やっと『何かご質問はございませんか』というセリフで売れるようになり、人並みの生活も送れるようになったやさきのガンでした」

入院してからの日記を読む時、ヒサさんは胸がしめつけられるように苦しかった。不安と絶望感がまたよみがえってきた。

「日記を写しながら、この日記をうらめしく思うことが何度もありました。日記を読むと、二年ほど前に血便が出たなんてことも書いているんです。もし、その時私にいつてくれたらと思うと、裏切られたという気持ちにすらなりました。日記に書くくらいなら、どうして私に、と考えると、くやしくてしかたありません。でも、この日記は、もともと手品のネタを考えたり、思いついたことを書くためのノートだったようです。奇術師にとって、ネタのしかけは、妻にさえも打ち明けてはいけない秘密なんです。それがこの世界の決まりなんです。多分、一人でネタ考えたよ

うに、自分の悩みも苦しみも日記の中に全部とじ込めてきたんでしょう。芸人らしいといえば、本当に芸人らしい一生でした……」

☆

伊藤一葉（本名・家晴）さんは、昭和九年六月十九日、兵庫県城崎郡竹野町の生まれ。昭和二十七年に県立豊岡工業高等学校を卒業。建築家の卵だったわけだが、父親の晴文さんが旅廻りの一座の支配人をしていたため「松旭斎天佐・天勝」一座に入団した。

一葉さんはもともと奇術師になりたかったわけではない。高校を卒業して、裁判所の事務官の試験にも合格していた。しかし、運の悪いことに、合格通知が着くのが遅く、葉書が来たのは、すでに旅廻りに出発したあとだった。

そして三か月後、三重県に来ていた一座に、家出同然のヒサ子さんが入団する。当時十九歳、一葉さんより一つ年下である。事務員をしていたヒサ子さんは、陸上競技で国体に出場したこともある負けず嫌いのとてもな性格で、事務など退屈だったのだ。

「最初に一葉に会ったのは、舞台上で手品のセッティングをしている時でした。紹介はされたはずですけど、顔など記憶に残りませんでした。私の仕事は舞台の衣裳を縫ったり、食事の用意をしたりという雑用で、一葉も手品の舞台には立っていなかったと思います。いつも本を読んでいて、

誰とも口をきかないので、変な人だなあという程度の印象しかありませんでした」

その頃から、一葉さんは酒を断やすことがなかった。自分の進むべき道が、ほんのささいな行きがちがいから狂ってしまったことに、やり場のない腹立ちがあったのだろう。

「私が一葉と話すようになったのも、やはり一葉の酒がきっかけでした。九州の小さな離れ小島の公演の時です。一葉が酔って、おまわりさんの鼻の穴に指をつっこんで、留置されたのをもらい下げに行ったのが最初でした。一日に焼酎を一升という生活でした」

やがて一葉さんは奇術を始め、ヒサ子さんがその「後見」（アシスタント）をつとめるようになる。

「そのうち、私の方が、一人でもやっていけそうだという自信がついて、退団して東京に出てきたわけです」

ヒサ子さんのあとを追うかたちで、一葉さんが東京に出てきたのは翌昭和三十三年のことだった。そして、ちゃぶ台一つ、はし、茶わん一組という「芸能荘」での同棲生活が始まった。

芸能荘での生活を、一葉さんは日記にこう書いている。

●上野駅から常磐線で約二十分の所に亀有駅はある。次の金町という町で東京は終わりだ。亀有駅の南口を出ると、かなり整った商店街が広がっていて、バスの発着やタクシীর群れが見られる。北口に降りると改札口の前がちょっとしたロータリー風になっている。南口は

どの賑やかさはない。小さな公園を抜けて映画館を二つ程横眼で眺めながら住宅街に入った所に、私の住むアパートがある。

「芸能荘」という特殊な名の通り、住人は全部芸人である。約四十組の新旧さまざまな芸人がたむろしている。建物はかなり老化しており設備も悪いが、家賃の安いのが取柄である。冬はさほどでもないが、夏はやりきれない。複雑だが下らない事情のため、電気器具を自由に使えないことになっている。アイロン、扇風機の類は、見つかると同居者からさえ苦情が舞い込むという伝説を聞いている。

この七月から家賃が五百円上がることになった。豪雨が襲来すると天井の一角がもるといふ非文化的な四畳半に巣くうことすでに六年。六年もたった気がしないのであるが、ずい分長い年月が経ったものである。

狭い部屋に洋ダンス、机、食器棚、本棚、ミシン、テレビとおびただしい家具を並べて、今はもうこれ以上何を置くことも不可能である。

奇術で生計を立ててはいるが、この仕事にあまり熱心ではないため稼ぎは悪く、貯金など一向に出来ない。近頃年を取ったせい、急にあせり出して、仕事のこともかなり考えてみるようになったが、まだまだ真剣味が足りない。平凡な人間生活を極度にきらった若い頃をふり返ると、今の自分がはじめなものに思える。小説家になるんだという情熱を潤らし、人生に対する望みを失ない、現在の仕事にさえも真面目に取り組めない、ほんとうに情けない

根性のない男ではある。と、いつものようなことをいく度くり返してみても始まらない。

奇術について。

奇術を始めてかれこれ、八年になる。きっかけは一座の奇術師がドロンの穴埋めのようなかたちではじめたのである。それまでは、やるつもりは全然なかった。最初のうちは小さなネタを三つか四つやっておしまいであったが、少しおもしろくなり、タネ本を求めて研究する気になった。

十二分も独り舞台が持つようになると、少しは欲も出てきた。生活能力として身につけようとする欲もあったらう。

独り立ちする自信があったかどうかハッキリわからないが、とにかく一座をやめて東京に出た。しかし仕事は都内ではまるでない。仕方がないので地方の仕事をしようになった。しかしこれでは以前と変わるところがない。独身ではないので、旅まわりばかりしているのはいやであった。ヒサ子の強い要望もあって、再び都内の仕事に戻った。つまり、二人でやる今の「剣通し」をはじめることになった。やっと二人で生活出来るようになったが、今度はこの剣通しが重くて身体にこたえるようになった。だが、これをいつまでも続けていく気はない。自分に確かな芸の力をつけるより解決の方法はないようだ。一人前の芸人になること。作家になることを人生の最高の目標とすること。以上の二つの基本線を方針とする。

今年の梅雨は少し早くやってきた。しかし梅雨特有の暗いジメジメしたイメージはこの雨

からは湧かない。今も窓の外のトタン屋根に雨がかすかな音をたてている。ひそやかに、決して大っぴらにはやらないのが気に入った。

（昭和三十八年六月二日）

「剣通し」は、人間の入った箱に上下左右から剣を通すという手品である。

この手品でキャバレーなどをまわり、ワンステージのギャラが八百円。ラーメン三十円の時代とはいえ、三千円の家賃を払い月はじめに米を買うと、一日の生活費は二人で百円程度にしかならなかった。

妊娠八か月まで、ヒサ子さんは大きなお腹をかかえてこの「剣通し」の箱の中に入っていた。替わりのアシスタントをやとう金などもろろなく、かといって一葉さん一人の手品ではギャラが安すぎて生活ができなかった。剣をよけそこなって、ヒサ子さんの体には傷がたえなかった。

長男利文君が生まれたのは昭和三十九年七月十日。生活はまだ苦しく、乳のみ児をアパートの住人にあずけ仕事に出かけた。

「地方に連れて行く時は、楽屋に入ると首から『この子に食べ物をあげないでください』と書いた紙を下げるんです。そうしないと、みんながかわいがってくれるのはいいんですけど、食べすぎてすぐお腹こわしちゃって……子供のことを考えると、もうこんな生活はいやだなんて、つくづく感じました」